事物の記憶

事物が孕む潜像を顕在化させる媒体(メディウム)について

東京藝術大学大学院 美術研究科

先端芸術表現研究領域

学籍番号 1315923 鈴木のぞみ

要旨

本論の目的は、写真の原理を通して外界の事物が孕む潜像のようなイメージを顕在化しようと試みた自作について検証することである。 同時に、その考察を通して自作の概念である〈事物の記憶〉とは何かを明らかにしていく。

ここでいう事物とは、自然物や人工物を含めた、客体的な事物(object)のことを指す。また、心理学における記憶とは、脳が物事を記銘し、それを保持し、その後に想起することである。したがって、通常、記憶とは人間や生物が保持するものであり、事物は記憶を持たないとみなされる。

では、〈事物の記憶〉とはいかなるものか。筆者が立てた仮説は、人間が人間以外の事物にまなざしを感じ、事物が主体となるような世界を仮想することで〈事物の記憶〉を見出すことである。そうすることで、逆説的に〈事物の記憶〉であると捉えられるのではないだろうか。

そこで、本論では、写真の原理における「潜像」を〈事物の記憶〉について思索する糸口とする。潜像とは、露光によって写真感光層に生ずるが、現像するまでは目に見えない像を指す写真用語である。したがって、光によって「顕在」化される物理的な変容可能性のことを遡行的に事物に「潜在」している「潜像」であると捉えることができるだろう。

事物が潜像を孕む現象は、写真における二つの基本原理に見出すことができる。一方は小穴投影現象であり、他方は感光性を持つ物質である。本論では、このような物理的現象により、われわれの日常に見出すことが可能な事物に潜在するイメージを〈事物の記憶〉と呼ぶことにする。そして、〈事物の記憶〉を仮想する行為を通して、事物に宿る記憶について思索する写真制作に意義を見出してゆく。

第１章では、〈事物の記憶〉とは何か、本論において前提となる部分について述べる。まず、心理学における「記銘」「保持」「想起」という記憶のプロセスを参照する。これらの記憶における３段階と、筆者の制作過程の全体を照らし合わせる。さらに、パースの指標(インデックス)についての概念とヤコブソンによる転換子(シフター)の概念を美術批評に用いたクラウスの「指標論」を引用する。クラウスによると、指標的に作品を制作する手続きは、作者の介入を打ち消すという。そのうえで、これまで筆者が取り組んできた支持体が何であるかという観点に従って「穴」「影」「鏡」「窓」「ガラス」に分類する。そして、次章からは各章ごとに筆者が実践した制作方法について考察することを示す。

第２章では、写真と穴について考察する。穴は「小穴投影現象」が生じる事物である。まず、写真黎明期の言説や作品を引用し、写真は自然そのものであり、客体性のある媒体(メディウム)であることを示す。つ

いで、中平の「事物の見返す視線」という言葉を引用し、ベルクソンが『物質と記憶』において、世界はすでに写真として撮影されていると述べた言葉を検証する。そして、山中の作品について参照し、ベンヤミンの言葉を引用しながら、複製性のある写真と一回性のある礼拝的な写真について言及する。そこから、穴に束ねられている光を顕在化した自作の手続きについて検証する。

第３章では、写真と影について考察する。まず、倉石の「光によって惹起される物質の病」という言葉を引用し、われわれの日常に存在する光による化学反応について確認する。ついで、ペノーネの作品と写真にまつわる言葉を参照し、写真は「光の化石」であるという写真論について考察する。そして、筆者がサイアノタイプや青焼きを用いてフォトグラムを試み、影の標本のように顕在化した自作について検証する。

第４章では、鏡と写真について考察する。まず、写真を見るという経験によってわれわれは人間不在の世界を享受したことについて言及する。ついで、バルトの言葉から写真の予兆させる被写体の不在について述べ、写真の触覚性と視覚性という二重性について検証する。そして、ダゲレオタイプが「記憶を持った鏡」と呼ばれたことに着想を得た自作について述べる。また、バッチェンのヴァナキュラー写真論において、写真に加工が加えられることで被写体が二重に指示対象として現される「インデックスの二重化」について言及し、事物としての写真がわれわれにもたらす作用を検証する。

第５章では、窓と写真について述べる。まず、バルトが語った指向対象が密着している写真の本質と、窓と指向対象の関係性について参照する。ついで、アルベルティの『絵画論』以後、絵画と共に写真は窓のメタファーとしても語られてきたことを述べる。そして、窓ガラスを支持体とし、窓越しの風景を直接定着する写真制作を試みた自作を検証する。また、ボブ・ショウのSF小説における「スローガラス」という空想上の発明品と自作の類似性について言及する。さらに、事物によって切り取られた構図をそのまま写すことで客体性を得ようとした自作、時間の選択における恣意性をなくすために小穴投影現象により長時間露光で撮影した自作について検証する。そのうえで、一軒の建物の窓に異なる時間軸のイメージを定着し、さまざまな時間が交錯する自作について検討する。

第６章では、ガラスと写真について考察する。まず、ハーマンによるオブジェクト指向存在論から「退隠」という言葉を引用し、現代哲学において主体と客体が等価な世界を参照する。ついで、梅津元の言葉である「擬物化」という身振りとはどのようなものであるか述べる。また、ゼーバルトの写真とテクストによる記憶の技法について検証し、クラウスによるシュルレアリスムにおける主体の克服について言及する。そして、筆者の博士提出作品において「時代の目撃者」としての事物の記憶について検証した自作の実践と作品構成について検証する。そこから、ガラスが嵌められた事物はシフターであると結論づける。

以上を踏まえて、〈事物の記憶〉を顕在化する写真制作にはどのような可能性があるか、実践を通して得られた事柄について述べる。事物が主体となる世界について仮想的に思索することで、作者が主体を退隠し、事物が見ている世界を顕在化すると考えられるだろう。現代の多様な視覚芸術表現において〈事物の記憶〉を顕在化する写真とは、人間を中心として構築された世界を見つめ直す視点を模索する行為として、重要な視点であると言える。今後の残された課題について述べ、結びとする。